

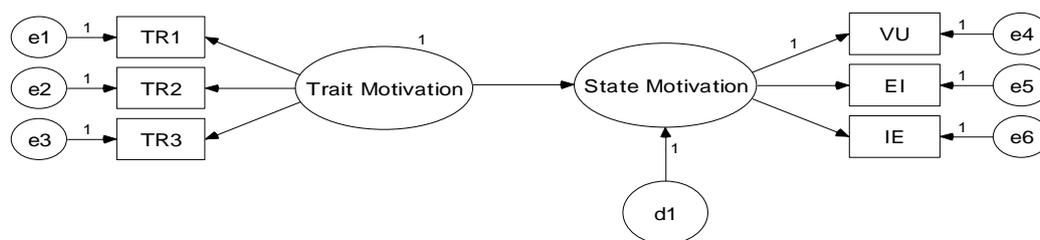
共分散構造分析 実践編

Previous Studies

- より教室内やその中で行われるタスクなど特定状況下における動機づけ研究の必要性(e.g., Crookes & Schmidt, 1991; Oxford & Shearin, 1994; Tremblay & Gardner, 1994)。
- 心理学の分野では動機づけはある特定の環境下で変わる状態的なもの(state motivation)と比較的に安定している特性的なものがある(trait motivation)と考えられた(Boekaerts, 1986; 1988)。
- Tremblay, Goldberg, and Gardner (1995)は語彙学習の場合においてこれら2つの関連性を調査したところ、特性動機が高いほど状態動機が高く、状態動機が高いほど語彙をより習得していたことを確認(分散分析)。
- その後の追調査で Gardner and Tremblay (1998)は特性動機が状態動機を介してパフォーマンスに影響していることを示した(偏相関)。
- Julkunen (1989; 2001)も語彙学習における調査を通して、特性動機 状態動機 パフォーマンスという可能性をモデルで提唱。
- Dörnyei ら(2000; 2002; 2004)はダイアログのタスクにおいて特性的な動機要因が高い学習者群には状態的な動機要因と表出語数に有意な相関が見られたことを示した(相関)。
- Boekaerts, Julkunen, Dörnyei and Otto (1998)らはタスクが与えられたとき、学習者は認知的評価(興味や価値、関連性)を行っているとは主張。
- 本当に特性動機が状態動機に影響を与えるのか?
- 語彙学習以外のタスクでもこの関連性が見られるのか?
- 特に状態動機の定義が曖昧で、1項目のみで測定されている。

RQ: スピーキングのタスクにおいて特性動機要因は状態動機要因を予測するのか?

仮定されるモデル



Method

- 111名の日本人大学生が調査対象
- 調査前に特性動機要因、タスクが与えられた直後に状態動機要因のアンケートを実施
- SPSSにより事前に因子を探索的に分析

操作方法

1. 使用データ

エクセルにて作成したのでそれをデータとして使用する。(ファイル名: AMOS 20080208)



からデータをセットする。

2. パス図を描く

まず図 2.29 の左半分を描く。で潜在変数を 1 つ、で観測変数を 3 つ、で誤差変数を 3 つ、描き、でパスを入れる。

また、を使うと、一気に観測変数 + 潜在変数 + 誤差変数を描くことができる。図の上をクリックした回数に応じて観測変数 + 誤差変数の数が増える。



を使用し潜在変数の上をクリックすると、観測変数の位置を変えることができる。



をクリックして全体をコピーし、もう 1 セットを作成する。

これと合わせて、 (選択)、 (全体選択)、 (選択解除)、 (移動)、 (コピー)、 (大きさの変更)を適時使用して、形を整える。

3. 変数に名前をつける



から対応する観測変数にドラッグ&ドロップでデータを当てはめていく。

Tool **Macro** **Name unobserved variables** を実行し、残りの変数に名前をつける。

潜在変数 F1・F2 をダブルクリックし、F1 には Text から Variable names に Trait Motivation と入力。F2 には State Motivation。さらに e7 d1 に変更。

4. 計算



から分析のプロパティを開いて、Output のタブを選択。"Minimization history," "Standardized estimates," "Squared multiple correlation," "Indirect, direct & total effects," "modification indices" にチェックマークを入れる。

Estimation のタブをクリックし、今回は Generalized Least Square を選択。



を押して計算を開始する。



を押して分析結果を図上に表示させる。更に、そのすぐ下にある"Standardized estimation"をクリックし、標準化係数を表示させる。



をクリックしてテキスト出力を確認。モデルはフィットしているでしょうか?

今回見るべき指標

CMIN (カイ二乗値) 有意か有意でないか

CMIN / df 2 以下が当てはまりの良さを表す

GFI .95 以上

AGFI GFI をパラメータの数に応じて調整したもの

RMSEA .06 以下で当てはまりがよい、.1 以上で当てはまりが悪い

CFI .95 以上

.